

海外日誌(九)

在米山本一清

四月二十七日(金)

朝八時半、例の通りの朝食に、昨夜の火事の話などして、「パンビー夫人が赤子をねかしつゝ、眞先きに異様な臭ひで気が付き、階下に降りて見れば、臺所は烟で一ぱいであつたこと、大びつくりで天文臺へ電話をかけ、主人始め、リー、ストルーフェ、パーク氏等の面々は勿論のこと、よそから御客様として着いたばかりのルンドマルク氏まで消火器を振りまはして奮闘したため、火は大事に至らずして消し止めた。——論功行賞の評定では、パンビー夫人の電話の機轉が何と言つても殊勳者、それから消防手としてはストルーフェ君とリー氏が第一殊賞だつた」といふやうなことを話した。食事後、室へ歸つて、一通り片付け、いざ研究室へ出掛けやうとする一瞬間、階下で、又もやバタ／＼。夫人の聲「又々火が出ました!」パンビー主人の聲、「ミスタ・パレットの宅へ走つて下さい!」宅の電話は効かないから!」そりや又大變。果して自分等の室の西北の隅からも白い烟りが立ちあがつて來た。英子は大切な物をカバンにつめ始める。自分は大意でパレット方へ走り、戸を叩く。同家夫人に「Fire! Fire!!!」と告げて置いて又宅に馳け戻る。パンビー夫人は赤子を抱いてパーク宅に走る。大混雜。……其のうちに隣り近所から多くの人々が集つて消火、放水。半時間ばかりで烟は全く納まつた。

火は消えたけれど、今朝再び火を發した原因は何だらう。「それが分るまでは」と、集まつた人々が家中を検査しまはり、板をはぐやち、壁を落すやらして、御ひるまへ、漸く、火の系統が判明した。昨夜の火が壁の中の層に移つたまへ、全く消滅してゐなかつたのだ。正午頃、村から集まつた人々も天文臺の人達も退散して行く。パンビー氏と動力室のエツチエン氏と、機械師サリヴァン氏だけは、夕暮まで居残り、後仕末やら破損個所の修繕などしてゐた。

英子は、午後、專所の掃除を手傳つた。ウイールソン山の、自分は研究室で可なりルンドマルク氏と話す。ウイールソン山のこ

こ、スエーデンのこと、最近の天文上の問題など。しまひに日本のこと、それに日本語の天文の書物が欲しいと言ふものだから、自著「星座の親しき」其の他一二、手許にあつたものを贈つた。英子は日本の郵便切手を四五枚贈つた。大喜び。

夜、又々火が出やしないかと、心配で自分は服を着たまへ眠る。パンビー氏は眼醒時計をならして一時間毎に起きて出て、家内の火の用心を見まはる。

(前日の最後「火を出したのださうだ。用心々々」を入れる筈)

四月二十八日(土)

皆々、もはや火の心配はあるまいといふ顔付。

夕方、パーク氏宅を訪問、それからフロスト方を訪問、ペン君に新しいレデオ(無線電話)を見せて(きかせて)貰ふ。

四月二十九日(日)

午前中、在宅。

午後、リー氏訪問、それから湖岸へ散歩。青年會カンプでは夏の準備が始まる。

今夕、フロスト臺長と夫人、ワシントン會議より歸る。

四月三十日(月)

今朝、ルンドマルク氏は當地を出發、歸國。

ニウヨウク・タイムスの日曜號と其の畫報やマガジンや新刊物號など見て、立派なことに感心する。

今日より、パーク教授指導の下に、二十四吋反射鏡の銀鍍が始まる。今日は鏡を塔から下して來て、鏡面を淨める。

五月一日(火)

今朝から、火の火事跡の壁ゆりかへで、職人が二人働いてゐる。吾々は研究室に逃げて行く。

五月二日(水)

珍らしく朝起きをして、家のまはり散歩する。パンビー氏は鋤を以つて、植木島を作つてゐる。

午後二時半から、天文臺ではパーク教授の命令で、パンビー、ストルーフェ、ヤンク諸氏、それに自分も共に地下室に集まり、二十四吋鏡の銀鍍金をやつた。三時半、見事に出來上つたが、御蔭で服

を汚すやら、手を染るやら。—ストールフェ君の両手指が一番黒くなつた。

午後四時より、自分は英子と共に汽車でレーキセネバ行き。デントラスト・ヴィカース氏に齒の療治をして貰ふ。

五月三日(木)

今日は終日、五二〇五二といふ二重星の記録を、昔しから現在まであらゆる文書についてさがす。書庫をあさつた結果として、今まで名だけ聞いてゐたやうな古書に幾種か御目にかゝつた。

五月四日(金)

昨日さがした五二〇五二星の観測結果を整理して軌道計算に取りかゝる。

夕方、フロスト臺長の依頼により、ちやうど此頃夕暮の西天に最大離隔の最中なる水星の寫眞を十二時で撮影す。今夜は空気が悪く四十時が休んでゐるやうな晩なので、結果思はしからず。九時からブルース室に入つて、小遊星及び北天を撮影す。

五月五日(土)

今日も二重星の計算。

夕方、また水星の撮影を十二時でやつた。やはり像は宜しくない其の後、例の通りブルースで観測。

五月六日(日)

朝十時から教會へ英子は新しい手製の絹服を着て嬉しそうに行く午後、ちよつとひるね。それからジエッキンズ牧師を訪問、いろいろ、日本の話とアメリカの話(主として宗教事情)とを交換す。

宅では、今日日ミシリン嬢の誕生日で、同嬢は朝早くから燥やいでゐた。午後五時頃から、附近の小供達を十人ばかり集めて来て、プレイハウス遊び家の屋上で賑々しくピクニックをやつてゐた。

五月七日(月)

英子は天體寫眞の現象に多忙。自分は二重星の研究。

午後、ひるね。—氣温が少々寒い。

今日から天文臺は、例年の通り南部ウイコンシン電力會社から電力を買ふこととなる。「特に電力を節約せられたし」といふ揭示が

出た。

五月八日(火)

昨日から寒氣俄かに加はり、今日は思ひもかけぬ大風大雪!! 青芽を出し始めた草や木も、小鳥も、皆尻込みの體。夜の温度實に華氏二十八度。—でも外出が出来ないので、豫定のレーキセネバ行きを電話でキャンセル。

天文臺へはメトカーフ彗星發見及びランブランド新星發見の電報がハーバードから来る。

夜、ランブランド新星附近をブルース鏡で撮影。

五月九日(水)

午前二時、雪を踏んでブルース室に行き、メトカーフ彗星を撮影—その未だ撮影の終らないうちに、バンビー氏が入つて来て—もう好いから早く現像しやうと促す。そこで曝露十三分にして終り早速暗室に馳け込んで現像、次で定着、次で検査。しかるに彗星らしいものは全く見當らない!! 「變だナア!」メトカーフに間違ひはあるまい、しかし電報の位置がおかしいネエ! など言つてゐる中に夜があけた。

朝八時、ハーバードより來電「メトカーフ彗星は取消し」おや〜 ナアンの事だ!!

五月十日(木)

聯合通信社より電報「モリアハウス氏がボン星表北三四度九八〇星が大きな星雲につままれてゐるのを發見した」といふ。フロストバンビー兩氏、圖書室で文書を調査して見れば、此の星が星雲につままれてゐることは何十年以前から知れてゐることださわかる。

—やはり又何か電報の文意の誤りか?

夜、十二時で北冠R星が十二・四級に下つてゐるを観測。

五月十一日(金)

英子は、朝、室の掃除。午後、研究室で白鳥S乙星の調査研究を始む。

自分はブルース寫眞版中の變光星を調査す。夜、フランス語勉強。